

以上、祐天伝のすべてではないが、その流れを概観してきた。それでは、どれが祐天の史実としての実像なのであろうか。当然疑問の湧くところである。また、これらの伝記が世間に与えた影響はどのようなものであったのだろうか。ただの娯楽として終わってしまったのであろうか。本論でそこまで明らかにすることは不可能であろう。しかしながら、できる範囲で史実を明らかにし、あるいは浄土宗的立場の伝記から僧侶としての祐天の思想などを探ることから始めてみたい。

次に、祐天上人の生涯を主として「浄土本」による諸伝記、なかでも『略記』を底本とし、『増上寺資料集』などの裏付けとなる資料を挙げながら検討していきたい。

第二章

● 顕誉祐天の生涯と行蹟

● 第一節 誕生といわきの信仰

祐天は寛永十四年（一六三七）四月八日に奥州磐城郡に生まれたことが諸伝記によって明らかである。新妻家の菩提寺である最勝院（浄土宗、現いわき市四倉町上仁井田）の位置か

らも間違いない点であろう。

現在でも菩提寺の近くに祐天の生誕地があり、新妻家の子孫がその地に住している。新妻家の敷地内には祐天手植えと言われる数珠の樹の子孫ならびに父母が子を授かるよう祈ったと言われる二十三夜尊（現在の碑は昭和十六年のものであり、裏庭に根本から二股に分かれた大木がありその中央に安置されている）がある。『略記』にある「欲^ク求^ト子^ヲ 每^ニ二十三夜^一拜^シ天子^ヲ 祈^ル之^ヲ」という記述は多分にこの地の民俗信仰に基づくものであると推察される。

現在に引き継がれているいわきの信仰は、『いわき市史』（七、昭和四十七年）、『写真で綴るいわきの講と野仏』（草野日出雄、ヤマニ書房、昭和五十一年）などにまとめられているので詳しくは触れないが、いわき市の所々に今でも建つ「十九夜」と書かれた石碑などを見れば、この地の民俗信仰の強さ、深さを推し量ることはできる。

『いわき市史』などの書によると、現在のいわきでも、十九夜のとくに百萬遍の数珠繰りをする習慣が残されている。伝記に出る二十三夜も伝えられており、「婦人だけが宿に集まり月待ちを行う講」で「四倉町下仁井田では、夜海に出かけ飲食しながら月の出を待つ。月が出ると御酒を備え祈りごとをして散会する」（『いわき市史』七、三五五頁）と言う。おそらくこの風習が江戸の寛永年間すでに定着していたものと考えられる。のちの伝記で二十三夜という言葉が出なくなるのは、祐天伝が全国的な広がりを見せる中でより民俗色から仏教色への転換を著者が意図した表れであろう。

このように、地域の民俗信仰の中から祐天は誕生し、成長していったのである。

現在の新妻家には、祐天が父母に贈ったとされる中央に名号の書された二祖対面図や徳川家から拝領の打敷と茶碗、祐海が祐全の生家に贈った祐天の肖像、祐全が祐天五十回忌に鑄た鉦ふがねなどがあり、この地で祐天が生まれたことを裏付ける貴重な資料となっている。

また、最勝院には祐天の両親の墓が存するが、当時は名越派であった。伝記に

於「京洛自他流リ本山并関東十八檀林等」咸棄「投シテ財産」

〔略記〕

と他流を挙げるのは、このことも一因であろう。

いわきの地は当時名越の総本山専称寺ならびに本山如来寺や成徳寺などの寺院が建つ、名越派の中心地であった。また真言宗の寺院も多く（『いわき市史』七、三九四頁）、密教的な信仰の地であったと言え、漁師町として祈祷や安全祈願に信仰が向かっていたことは容易に想像できるところである。

参考に記すと新妻家の家紋は「九曜星」、幕紋が「月に星」であり、祐天の肖像画（祐天寺蔵）にも描かれている。いわきには新妻姓は多く、いずれも「九曜星」を家紋とする。最勝院にも新妻十八家という位牌が飾られているほどである。「九曜星」は千葉氏の家紋であるが『いわき史料集成』（第五冊、平成四年）の四倉の項によれば、文正年間に下総より千葉六党

が陸奥に来てそれぞれ岩城氏、相馬氏、神谷氏、四倉氏などその土地土地で勢力を張っていたことがわかる。新妻一族がこの流れを汲んでいることは十分に考えられることである。一部の伝記（『縁山志』や『磐城志料』）には葛西三郎清重の四男新妻隠岐守朝重の流れとあるが、葛西家の家紋は三つ柏（千鹿野茂『日本家紋総監』角川書店、平成五年、二二一頁）であり、奥州では滅亡の道をたどっていることから史実としては認めがたい点もある。

●第二節 出家とその背景

祐天は十二歳のとき出家した。『略記』によれば狐が三回鳴いたことを祖母が「嘉瑞」として、もし出家したならば「ス則声達セン異朝ニ一発ニ」センコトハノ其功名ヲ者真俗ヲ両ヲ得也ヲリ」と言つて出家を勧めたことによるのである。

この祖母は妙光尼と言うからすでに出家の身であつた。そして、縁山に祐天を手引きした伯父も道法という僧であり、縁山塔頭たつちゆう壽光院の休波も師の伯父（『行状記』には父重政の弟とする）である。道法なる者がどこの寺院に属していたかは不明であるが、祐天の周囲には多くの出家者がいたことになる。

いわきという地が信仰に厚い地域性を持つことはすでに述べたが、その当時のいわき周辺の生活などの状況はどうであつたのであろうか。祐天はしばらく子のなかつた両親から生ま